

〈水俣病をかかえて歩き回る〉とはどういうことか^①

——「水俣巡礼」考——

丹波 博紀

はじめに

水俣病は熊本県水俣市で1956年5月に公式確認された。原因は、チッソ水俣工場が水俣湾（一時期、水俣川）に流した工場廃液に含まれるメチル水銀である。工場からのメチル水銀の排水が止まるのは1968年5月のことで、公式確認から12年後のことである。政府はこれを待っていたかのように、68年9月水俣病をようやく公害認定した。水俣病患者と終生寄り添いつづけた医師の原田正純は、こうした事態をふまえて、水俣病のもっとも大きな原因は「人を人と思わない状況」つまり人間疎外・人権無視・差別といった言葉でいあらわされる状況だとした（原田〔1989：1-4〕）。

もちろん、これまで人びとは、こうした「人を人と思わない状況」をただ座視してきたわけではない。たとえば、本稿で考察する「水俣巡礼」がそうである。水俣巡礼とは、おもに俳優・砂田明と、19歳から25歳の若者9人が1970年7月に水俣まで浄財（カンパ）を募りながら旅をした「東京 - 水俣巡礼」のことを指し、この巡礼のあとにも砂田たちはいくつもの旅をおこなった。当時、患者は地域で孤立し、差別のただなかにあった。そうした患者にとって、白装束とすげ笠という巡礼姿で、衆目を集めながらやってくる砂田たちの姿は、深い感動をもたらすものだった。以後、巡礼姿は患者運動の定番となった。

こうした水俣巡礼は今日かならずしも語られていない。その理由の1つは、（熊本）水俣病の場合、中心はやはり水俣なのであり、一方の水俣巡礼は東京（関東）から水俣に向かう、あくまで「支援者」たちの運動だったことにある。水俣病患者・家族という病い・被害における当事者に対して、支援者はあくまで周縁的存在である。だがそうだとすると、水俣巡礼は水俣病の運動（思想）史において重要な位置にあり、語られるべきものである。

本稿ではこうした水俣巡礼について考察を進める。その際にとくに注目するのが、東京 - 水俣巡礼団の1人、岩瀬政夫（当時、立教大学大学院生）の記した日記である。この日記は1999年に『水俣巡礼 青春グラフィティ'70～'72』（現代書館）として刊行されているが、1970年代前半の水俣病をめぐる状況を伝える一級の資料である。

本稿では、この日記で岩瀬が挙げる〈水俣病をかかえて歩き回るとはどういうことか〉という問いに注目し、その解明を目指す。結論を先取れば、〈水俣病をかかえて歩き回る〉とは、「水俣のもたらす具体（現実）的な問い（＝課題）」を自身の大切なものとして、かかえ歩く、ということである。また、その意味での「巡礼」である。私はこの岩瀬の思いなしのうちに、「水俣巡礼」の思想を見届けたいと考えている。そして、それはまた1970年以来、水俣にかかわろうとする者たちが少なからず抱く、「人を人と思わない状況」に対する

思想の1つであるという展望を描きたいと考える。

1. 水俣巡礼

水俣病の運動史において、「水俣巡礼」と呼ばれる旅は、しばしば俳優・砂田明（1970年当時42歳）が団長を務め、岩瀬政夫ら19歳から25歳までの若者9名とともにおこなった「東京 - 水俣巡礼団」（1970年7月3日～12日、水俣到着は10日、解団式12日）のことを指す。

先に断れば、砂田たちがおこない、「水俣巡礼」と呼んだものは、これ1つではない。たとえば表1のとおり、「東京 - 水俣巡礼」には第1・2次（①・④）がある。ただし、水俣病の歴史において東京 - 水俣巡礼という場合、ほぼ①を指す。この表についてさらに言及すれば、②は岩瀬政夫と高橋孝次によるもの、③は岩瀬によるものである。本稿では①に加え②③にも目を向ける。なお、この表では②③についてそれぞれ「水俣 - 東京（裏日本）巡礼」「東北 - 北海道巡礼」とあるが、そもそも定まった旅の名称があるわけではなく、たとえば②については「巡礼帰路の旅」など、文献によって表記の揺れがある（岩瀬 [1971]）。ただし、本稿では表1の表記に従うこととする。

表1 砂田明らによる「水俣巡礼」の一覧

	旅程	参加者
① 第1次東京 - 水俣巡礼	1970年7月3日～12日	10名
② 水俣 - 東京（裏日本）巡礼	8月4日～15日	2名
③ 東北 - 北海道巡礼	9月12日～10月17日	1名
④ 第2次東京 - 水俣巡礼	11月19日～12月1日	6名
⑤ 苦海巡礼・1（東京 - 水俣）	1971年4月10日～4月27日	13名
⑥ 苦海巡礼・2（関西公演）	5月22日～5月27日	13名

出典：『東京・水俣病告発ニュース「苦海」』東京・水俣病を告発する会、
1971年6月15日、第8号（和暦を西暦に改めるなど表記等を一部改変）

さて、東京 - 水俣巡礼の参加者は、白装束にすげ笠といういで立ちで、「水俣へ浄財を」と記したずだ袋を首からさげ、「東京 - 水俣巡礼団」という旗をもって旅に出た²⁾。この旅が「巡礼」とされた理由は、砂田がこの旅を「水俣観音廻り道行」と位置づけていたからである。本節では、砂田明を中心にこの東京 - 水俣巡礼について見ていきたい。

彼らは7月3日に東京を出発し、同月10日に水俣に到着するまで、途中下車しながら、ゆく先々で裁判（1969年6月14日提訴）をたたかう水俣病患者への「浄財」と支援を訴えた（表2）。その浄財は、総計673,284円に及び、熊本市まで出迎えに来た患者に渡された（交通センターホテルで夜に開かれた患者激励集会でのこと）。このシーンは土本典昭監督・映画『水俣 患者さんとその世界』（1971年）に収められている。

表2 東京 - 水俣巡礼団, カンパ

7月3日	東京・川崎・横浜	83,632
4日	富士・名古屋・四日市	151,188
5日	京都・万博	88,280
6日	大阪・神戸	140,360
7日	広島・岩国	59,725
8日	徳島・北九州	68,990
9日	博多・熊本	61,705
10日	熊本	12,573
11日	水俣	6,831
総計		673,284円

出典：岩瀬政夫『水俣巡礼』現代書館，1999年

お金はもともと両替する予定だったという。だが、砂田によれば「子供さんが1円玉を下さったり、〔中略〕掃除のおばさんたちが、10円玉を下さったりしますと、そのお金、そのものをこちらに持ってきたという気持が、皆、強く」なり、預かったままに渡されたという（土本 [1974a : 263]）。団員の1人、白木喜一郎によれば、巡礼団はこのとき「お金ではなく、1人1人の思いだということ」も伝えたという（白木 [2022 : 34]）。それは患者側にもいわずもがなだったにちがいない。砂田と9名の若者たちは遍路姿で公害列島をめぐり、街頭に立ち、「1人1人の思い」としての「ナマの支援」を預かり、患者に届けたのだ（岡田 [1971 : 111]）。それは金額の問題では到底ない。

むろん、患者たちが「そうしてほしい」と頼んだわけでもない。だからこそ、余計に感情を揺さぶるものだった。「水俣病を告発する会」代表の本田啓吉は1973年の文章で「今でも「あの時が一ばんうれしかった」と言う患者は多い」と書き記している（本田 [2007 : 177]）。こうしてその後も巡礼姿での行動は「患者運動の定版」となり（宮本 [1998 : 45]）、たとえば患者たちは70年11月28日のチッソ株主総会（会場：大阪・厚生年金会館）に白装束で向かった（11月29日には高野山参詣もしている）⁽³⁾。

以上、水俣巡礼の概略について確認してきた。では砂田はどうして巡礼の旅を思いついたのだろうか。「はじめに」で述べたとおり、本稿の目的は砂田自身よりも、〈水俣をかかえて歩き回る〉という岩瀬政夫の日記にこそ注目することにある。ただし、岩瀬もまた砂田に誘われて巡礼に参加したのであり、そもそもの発端には砂田がいる。ならばなおさら、砂田の初発の思いを確認する必要がある⁽⁴⁾。

1928年生まれの砂田は戦後すぐに役者を志した。60年代末には舞台芸術学院で講師をし

ており、自身の劇団「地球座」を主宰していた。砂田によれば、ちょうどその頃の彼は1960年代末の若者の叛乱の時節のなかで、自身もまた若い世代からするどく問われていた。そうして「若者たちが鏡になって、平均的大人として戦後社会の中にちんまり納まっている自分が映し出され」、転身を決意したのだという(砂田 [1983: 29])。

そんな砂田は1970年に石牟礼道子『苦海浄土』(1969年刊行)と出会い、大いに触発され、その劇化を熱望するようになる。「「ああ、こんな大事を無視して自分は芝居を、役者を続けていたんだなあ」ということが痛いほど胸にくる」と書いている(砂田 [1983: 31], ()内引用者による)。劇・苦海浄土は、東京・水俣巡礼後の1971年4月に至り、副題に「もうひとつのこの世へ」を添えて全国巡演されることになる(表1の⑤⑥)。

砂田が『苦海浄土』に出会って以降を順に追っていきたい。1970年5月、砂田は「朝日新聞」で水俣病訴訟派患者がチッソ前(東京・丸の内)に坐り込んでいることを知り、「すわりこんだ患者さんのむしろの片隅に、声もなく、もごもごとすわらせてもらった」(土本 [1974b: 57])。これは土本典昭が書き留めることだが、当時2人は、厚生省補償処理委員会による一任派患者への低額あっせん案提示を阻止する行動(「5月行動」)をめぐる知り合っていた⁶⁾。土本は砂田の様子を次のように語る。

そのごぞの上で、道ゆく東京の人を仰ぎみながら、彼は水俣の人々と同じ、“非人”に近い心を味わったのであろう。思うに、彼が、『苦海浄土』を上演するためには、3か月間、巡礼服で水俣まで行脚したいとあって、私たちが厚生省の中に突入するプランに至る討論を重ねて上気している中で、同じ赤らみの顔ながら、一念、非人の心を自らに問うかげりのあったのを思い出す(土本 [1974b: 57])。

砂田が読んだであろう記事には次のようにある。「多くの東京の人たちは、すわり込む場所の弔旗の前を足早に通り返っていった。歩道に並べた、水俣病の悲惨を訴える写真にも、カンパ箱にも、振向きもしなかった」(朝日新聞1970年5月16日朝刊, 23面)。東京の路上でムシロに坐りこみ、道行く人たちを見上げる——。見上げた先には見上げる者をいないものとし、気づいても見おろすようなまなざしがある。それはどんな状況だろうか。

砂田もその場所にしようとし、患者と同じく道行く人びとを見上げたことだろう。そのとき彼にどんな心持が到来したのかは、はかりようもない。ただ、当時の彼は被害者の惨苦を坐視してきたことに対して「あやまりたい」と考え、みずからの罪を自覚し、贖罪の道を歩みつつもその不可能性をかみしめたいと考えていた。そうした砂田のなかに、「勸進」として喜捨を求め漂泊することへの思いが生まれた可能性は十分あっただろう。彼はそれをするなかでこそ「個の新しい生き方」を始められると考えた(砂田 [1975: 16, 22-23])。

だが、それはそうだとしても砂田は俳優である。仮に漂泊するとしても、それは役者としてのものとなる。実際に彼は「初の水俣入りを、巡礼行脚にて果たしたいと思ひそめ

ていたからですが、その思いの背後には演劇と民俗の交錯があったようです」と書いている(砂田 1983 : 33)。この「演劇と民俗の交錯」とは何か。これについての砂田の説明は少々意味が取りにくい。その上で、解釈をすれば次のように説明できるか。

まず砂田は、水俣で暮らす「ゆき女や江津野老や童女たちや少年たち」、つまり水俣病の患者たちについて、その煩惱の深さゆえに正真の(救世観音)、煩惱即菩提を直観した(砂田は明言しないが、こうした煩惱即菩提のなかに水俣の(民俗)を見出したいのだろう)。では、こうした観世観音(観世音)=水俣病患者には、会いたければ会えるものなのだろうか。そうではない。ここで〈演劇〉ということが出てくる。

たとえば巡礼当時、砂田はみずからの劇団で近松門左衛門『曾根崎心中』の演習をしていた。『曾根崎心中』の終幕は「心中道行」を描くが、そのなかで牽牛と織女が登場し、宇宙大に恋=煩惱の成就が交わされる。これが観客に深い感動を与えるのだが、砂田によればこうした感動は序幕の「観音廻り道行(巡礼道行)」なくしてはありえない。つまり巡礼道行という〈序幕〉があるからこそ、観世音による救いとして恋=煩惱=菩提が実現される。つまり、〈序幕〉があつてこそ患者たちと水俣で会うことができる。

砂田はこうしたことを「演劇と民俗の交錯」といいかかったにちがいない。そして、この交錯したところに〈水俣観音廻り道行〉と名づけられる巡礼の旅が成立する。砂田はみずからの白衣の背に、〈水俣観音廻り道行〉の文字を中心に、次の文字を書いたという。

げ
実にや安楽世界より 今この娑婆に示現して/吾等がための観世音 仰ぐも高し
しやば じげん くわんぜおん
しろうじ くがい いて
高浪の/生死の苦海漕ぎ出て みなまた逢はんと不知火の/無明の浦につき給ふ
わみやう
湯の児の浜の汐けむり/聖をとめの名は くみこ(汲み娘) (砂田 [1975 : 23-24])
ひじり

確認すれば、水俣病患者にどう会えばよいのか、砂田においてそれは極めて切実な問いだった。その1つの回答は、水俣病患者を〈苦海=この世〉に示現した観世音と〈見なし〉、その患者たちのもとへと巡礼することである。それほどのことを行ななければ、水俣に行けない、「個の新しい生き方」などできようもない。もちろん砂田が水俣病患者と出会ったところで、そこで観世音と出会うわけではなく、出会うのは、病いと生きる人びとのリアリズムであり、その生き方である。それがまた、出会う人びと=巡礼者において、自身や、患者の置かれる「この世」のことではない(患者の生のなかに浄土はあるといっても、それが〈苦海〉であることに違いはない)、「もうひとつのこの世」のことを思いなさせ、そうした生き方へと誘わせたことは確かである。この結実として「劇・苦海浄土 もうひとつのこの世へ」がある。

さて、この砂田の巡礼の旅については以上のとおりだが、次節に向かうにあたって、こうした〈観音廻りの〉巡礼の旅が水俣病を「この世」のこととして生きる人びとにおいて何であったのかを確認しておく。端的にそれは、目撃者においてまさに「もうひとつのこ

の世」を演劇の呪術性をもって拓くものだったといえる。これを目撃した人びとには、いまある現実とは異なることが起きるのかもしれない、そのような可能性が感じられたはずだ⁶⁾。たとえば石牟礼道子は、東京 - 水俣巡礼団について次のように書き記す。

砂田さんの来水や、水俣に定着しつつある行者めいた支援者たちの姿に接していて、あらためてふにおちる想いがあるのですが、それは、この国の民間伝承の中にある、お地蔵さま伝説、弘法大師伝説、観音さま伝説、あるいはそのように変幻しながらあらわれる貴種流離譚のたくいです。[中略]

水俣病患者たちのおかれていた状況は、菩薩たちの艱難辛苦を、はるかに越えたものと自覚されていました。わが身の上に具顕される神仏を祈って待つ民衆の心情が、たしかにここにはあるのです。砂田さんと患者たちとの出遭いをみるにつけ、新しい民間伝説の創生の過程を、私はみているおもしろがっています (石牟礼 [1975 : 1, 2])。

砂田は水俣病患者を〈観世音〉と見立て旅に出て、ついにそこに「もうひとつのこの世」を思いなし、のちに「苦海浄土」を劇化した。一方、受け入れ側である水俣病患者からすれば、苦行者さながらに勧進しながらやってくる者たちこそ「お地蔵さま、弘法大師伝説、観音さま伝説」、つまりこの世に現れた〈聖なるもの〉にたとえられるものであり、その演劇的な空間のなかで自明性のやぶれを経験したはずだ。

以上砂田明が水俣巡礼にどのような思いを込めていたのか、またその思いの行きつくところを確認した。では、こうした砂田たちの水俣巡礼は、巡礼の思想史にどう位置づくのか。次節では巡礼の思想史を一瞥し、その思想史において水俣巡礼の占める位置を検討したい。

2. 思想史における水俣巡礼

2.1 巡礼の思想史と水俣巡礼

「巡礼」と呼ばれる旅のあり方は、時代々々で異なり一様ではない。だが、どの時代でも〈聖なるもの〉とのかかわりのもと、聖地に近接しよう、訪ねめぐろうとするあり方であることは確かだろう。〈聖なるもの〉とは、私たちの経験において、私たちに魅せる一方、厳かに戦慄を与える（寄せ付けない）ものである（オッター [2010]）。こうした〈聖なるもの〉は、私たちの日常的経験の次元をやぶる、つまり「この世」的でないという特質をもつといえる（西谷 [1961]）。この点にこそ、〈聖なるもの〉が私たちを掴み、私たちがそれを渴望する事情がある。

ただし、このように巡礼が〈聖なるもの〉への近接・訪ねめぐりだとしても、このことがつねに信仰目的の実践であるとは限らない。たとえば私たちがあるモノの美に崇高さや荘厳さをおぼえた結果、そうした美術をめぐる旅に出てもよい（「古寺巡礼」。和辻[1961:28]）。

また、聖なる場所（聖地＝ゴール）に向けて歩くこと自体（プロセス）が、旅の目的となってもよい（癒し、自分探し・内観、人との出会いの旅。岡本 [2015: 74-80]）。

いずれにせよ、どの時代でも巡礼は〈聖なるもの〉とのかかわりのなかにあつた。巡礼の移り変わりを佐藤弘夫の整理にもとづき確認すれば次のようになる。以下は主として佐藤 [2010] からの引用・要約である⁷⁾。

佐藤によれば、まず古代における巡礼は、行場巡りの修練であり、俗人を完全に排除するかたちで専門の行者によって担われた。修練の場である山は人間を超越する特別な威力をもった存在（カミ）が住むところであり、この世でもっとも清浄な場所だとされた。こうした場所はこの世から容易に往復できる場所にありカミや死者は人間と1つの世界を共有していた。修行者は修練をつうじて身体を浄化することでカミに匹敵するパワーを身につけることを目指し、そのパワーをもって天皇とその支配下の秩序を護ることを最重要の課題とした。

こうした古代の世界観に変容が見えてくるのが10世紀後半以降である。この世と隔離した彼岸世界の観念が徐々に拡大し、ひとたび他界へと旅立った人間は、容易にはこの世に帰還できないと考えられるようになった。この世界観のもと、古代において靈験あるカミと認識された聖人祖師、神祇、仏像などは、彼岸の救世主の垂迹として位置づけられ、目に見えない遠い本仏と現世の人間のあいだを取りもつ仲介者の役割を担うとされ、その所在地は来世への通路＝この世の浄土とされた。こうした彼岸と此岸を結ぶ通路としての霊場が院政期に点々と出現し、僧俗問わない本格的な参詣が始まる。

14世紀ごろからこうした中世的世界観に変容が見られ始める。彼岸世界が衰退・縮小し、現世の重みがそれに反比例して拡大してくる。死後往生の対象としての他界のリアリティを失った人びとは、来世での救済よりも、この世での幸福の実感と生活の充実を重んじるようになる。こうした状況は霊場のあり方にも影響を及ぼす。霊場のもつこの世の浄土・彼岸への通路としての意義は失われ、礼拝の重心は現世利益の祈願に移った。祈願内容におうじて神仏の役割分担も進み、それらを巡拝するコースも整い、人びとは定められたコースに沿って多数の霊場をまわるようになる。物見遊山（観光）との一体化も進み、めぐること自体が目的となる時代が始まる。

以上、佐藤 [2010] にしたがって巡礼の思想を3つの時期にわけて確認してきた。これは、人が〈聖なるもの〉に近接しようとする理由を示すものだが、先に確認したとおり、〈聖なるもの〉とはどこか「この世」的ではない。古代において〈聖なるもの〉はこの世の山中にあると観念された。つづく中世になると、彼岸世界は拡大し、〈聖なるもの〉はあちらへの通路となる。これが反転するのが近世である。社会の世俗化にともない、人はそれを訪ねめぐること、この世のことをめぐって請い・願うようになる。近現代はその延長線上にある。たとえば聖地に近接することをつうじて、病いの回復を願い、癒しを求め、自分を探し、パワーを求めたりする。

このように巡礼の思想を確認してきたのは、日本思想史に、ことに水俣巡礼を位置づけるためである。図式的に整理すれば、とくに東京 - 水俣巡礼は「この世の」病者を訪ねることが出発点におかれる点で、やはり近現代的な巡礼の特徴を有する。

一方、砂田明たちの水俣巡礼を全体で見た場合、巡礼の思想史から一見大きく外れているようにも思える。つまり、最初の東京 - 水俣巡礼のあとはかならずしも〈聖なるもの〉に近接し、訪ねめぐろうとしているわけではない。たとえば表1③の東北 - 北海道巡礼は、仮に水俣病患者を観世音=〈聖なるもの〉と見なしたならば、そこから地理的に離れる動きではある。ただし、③をおこなった岩瀬自身はこれを巡礼であると理解している。これについては3.2で詳しく検討する。

2.2 「苦海浄土」と水俣巡礼

さて、2.1では巡礼の思想史のなかに水俣巡礼を位置づけた。とくに砂田は、最初の東京 - 水俣巡礼において、水俣病患者を観世音=〈聖なるもの〉の示現と見なし、それを訪ねめぐることをつうじて「個の新しい生き方」を願った。それは思想史上、近現代的な巡礼の特徴をもつものだと指摘した。ただし、最後に触れたように、水俣巡礼全体を見ると、巡礼者がみずから旅を「巡礼」と規定する一方で、いわゆる「巡礼」から逸脱している側面も見出せた。

ところで、このように水俣病患者を〈聖なるもの〉と見なす発想は、砂田明ひとりのものではない。砂田が石牟礼道子『苦海浄土』(1969年)に触発され、巡礼の旅を思い立ったように、もともとは石牟礼にそのきっかけがあったといえる。いささか本論から外れるところではあるが、重要な論点ではあるので、以下簡単な検討を加えたい。

水俣病患者を〈聖なるもの〉と捉える発想は、そもそも「苦海浄土」という4字に込められているように思われる。むろんその解し方はひと通りではないが、ここではこの4字が〈苦海のなかの人びとの生にこそ浄土はある〉ことを意味している、と考えたい。

「苦海」という言葉はもともと弘法大師和讃の「繫がぬ沖の捨小舟 生死の苦海果もなし」から取られたものであることは、『苦海浄土』第1章「椿の海」の扉で明らかにされている。和讃におけるその主語は「罪業深きわれわれは」であり、そうしたわれわれはあたかも大海洋を漂う捨小舟のようなものであり、安宅を求めながら反復して苦の生を享けているが、その苦海に弘法大師が救済の船として・慈悲の権化として現われる、というのだ(宮崎[1920: 82-83])。そうであれば、「誠に大師様は大日如来の御化身、あらゆる仏、菩薩の御垂迹と拝せられる」となる(寿山[1916: 225])。すると、苦海浄土とは、水俣病を病む人びとが垂迹たる弘法大師を介して、自身またはその近親者が浄土へと往生することを願う、と解することができる⁸⁾。

だが、石牟礼は「苦海浄土」という言葉をそうは理解していない。以下中村了権との対談「苦海に生きる」(1988年)に従い、確認してみる。

まず苦海とは和讃から引かれたものだが、これについて石牟礼は「現世は苦海」「われ、ひと共にみな苦海にいるという感じがして(いる)」と述べている(石牟礼・中村[1994:128]、()内引用者による)。一方、浄土とは、お互い心を通わせて生きていく世界であり、「この世の楽園」である。苦海を生きる患者は、かつてそうした世界へと行き来できたが、水俣病発生後できなくなった。だからこそ、逆説的に彼らは「楽園」として未来へと思いなすわけだが、これを「体験する時もある」(石牟礼・中村[1994:128])。

この「体験する時もある」という言葉には、注意を要する。つまり、石牟礼が『苦海浄土』で描くことの1つは、こうした「体験」であるからだ。たとえば『苦海浄土』第4章「天の魚」は、天草出身の江津野老による、あねさんへの語りで構成される。江津野老は孫の空太郎少年のことを「わしも長か命じゃござっせん。長か命じゃなかが、わが命惜しむわけじゃなかが、空がためにや生きとろうごてござす」といい、「魂の深か」孫へのふかい煩惱を語る(石牟礼[1972:176])。石牟礼は煩惱のことを「相手を全身的に包んで、相手に負担をかけさせない慈愛のようなもの、それを注いでいる心の核」(石牟礼・中村[1994:125])と説明するが、石牟礼は江津野老にそうした「心の核」のようなものを見出し、そこに「苦海のなかで夢みたり・体験する浄土」を見届けるわけだ。砂田が水俣病患者たちに観世音の示現を直観したのも、もとはといえばこうした石牟礼の理解があつてのことである。

もちろんこれは微妙な言い方でもある。つまり、たとえば私たちは、「苦海」たる水俣病の状況を「浄土」そのままと考へてしまう可能性がある。1960年に水俣の取材を始めた写真家の桑原史成は、当時の水俣の貧困にあえぐ様子を「苦海地獄」と評したが(桑原[2013:114])、そうした「苦海地獄」を私たちは「浄土」といってしまう恐れがあるわけだ。こうした私たちの傾向については、ほかならぬ石牟礼自身が批判している⁹⁾。つまり、石牟礼はたしかに「苦海のなかの人びとの生にこそ浄土はある」ことを願ったが、それはあくまで「苦海」だったのだ。

それでは砂田ら巡礼団の面々はこうした「苦海のなかの浄土」と対面し、いかに思いなしたのだろうか。つまり、実際に水俣病患者と出会い、〈聖なるもの〉を訪ね、それで旅を終えられたのだろうか。実際には、その経験をかかえ、「もうひとつのこの世へ」と、さらに向かわざるをえなかったはずだ。東京・水俣巡礼ののちの「劇・苦海浄土」(表1⑤⑥)において、砂田たちがその案内文を「悶絶した死者たちの鎮魂と生者(わたし)たちの人間回復が一つになる新しい生き方を探したい」(巡演チラシより)と書くのは、そうした思いがあつたからである。

ここで2.1に戻れば、水俣巡礼全体を見ると、これが巡礼の思想史から逸脱した側面をもたざるをえないのは、巡礼者たちが外から〈聖地〉を目指し、実際にそこで出会ったのが、あえていえば「苦海」、端的には人びとの置かれた現実だったからである。巡礼者たちはそうした現実をかかえ、みずからの「生き方を変える」ため、さらに歩かざるをえなかった。ではこれはどのような旅となつたのか、またそれがそれでも巡礼であるとはどうい

う意味なのか、この点について、次節では岩瀬政夫の日記をもとに検討を進めていく。

3. 水俣をかかえて歩き回る

3.1 岩瀬政夫と「水俣巡礼」日記

岩瀬政夫は1970年5月の厚生省前行動への参加をつうじて砂田明と知り合い、東京 - 水俣巡礼に参加し、そのあとも白装束姿で日本中を歩き回った人物である。表1のうち②水俣 - 東京(裏日本)巡礼、③東北 - 北海道巡礼は、岩瀬によるものである。彼は東京 - 水俣巡礼時点で25歳、巡礼団員のなかでは砂田を除く9名の巡礼者のうち最年長だった(表3)。自身のことを、1944年生まれで、物心ついたときには戦後の復興期に入り、戦争の悲惨さを知らずに育った世代だという(岩瀬[1999:462])。

岩瀬は当時、詳細な日記を付けていた。日記は以前からつけていたようだが、岩瀬から聴いたところでは、砂田から考えたことをしっかり書き留めておくよう勧められ、この時期はとくに丁寧な日記をつけていたのだという。この日記は、1996年12月に団員の1人、市原靖彦がマレーシアで急死したのを受け、皆が集まった折に存在が明かされ、同じく巡礼団員の宮本成美の勧めで、追悼文のつもりで公表を決めたのだという(岩瀬[1999:468])。これが1999年に宮本の構成のもと『水俣巡礼 青春グラフィティ'70~'72』(現代書館)として刊行された。以下の議論は、おもにこの日記と、筆者が2023年11月17~18日に岩瀬に対しておこなったインタビューにもとづいて進める。

表3 東京 - 水俣巡礼団員

砂田 明	劇団主宰	(42)	埼玉
岡田 徹	立教大生	(24)	東京
岩瀬 政夫	立教大生	(25)	川崎
白木 喜一郎	劇団塾生	(20)	東京
高橋 孝次	劇団員	(22)	東京
魚住 道郎	東京農大生	(19)	横浜
相徳 和正	立教大生	(19)	東京
村岡 茂芳	東北大生	(21)	東京
宮本 成美	写真家	(22)	千葉
市原 靖彦	明治大生	(22)	川崎

出典：『水俣病裁判支援ニュース「告発」』

水俣病を告発する会、1970年7月25日、第14号

刊行された日記の期間は、1970年4月27日から72年4月8日までである。1970年4

月、彼は立教大学大学院英米文学専攻修士課程の学生で、1972年4月に都立定時制高校(大島南高校)の英語教員として伊豆大島に移住したところで日記は終わる。構成者の宮本は、期間中の特徴的な出来事・テーマに沿って日記を6期に分け、それぞれに章題をつけている(表4)。ここではこの章立てに従い、その内容を確認したい。

表4 『水俣巡礼』(現代書館, 1999年) 目次

〈解題〉	不可視の旅 存在の根を求めて(栗原彬)
まえがき	全共闘運動に触発されて
第1章	巡礼 (1970年4月27日～8月1日)
第2章	新潟へ (1970年8月4日～30日)
第3章	放浪 (1970年9月8日～11月9日)
第4章	足元 (1970年11月10日～71年4月3日)
第5章	告発 (1971年4月10日～11月28日)
第6章	幻の舟 (1971年11月29日～72年4月8日)
あとがき	自立への旅

◇ 巡礼(1970年4月27日～8月1日)

「5月行動」への参加を契機に水俣とのかかわりを深め、東京-水俣巡礼団に参加し、水俣にひと月ほど滞在する期間である。岩瀬は『水俣巡礼』まえがきで、みずからの水俣とのかかわりは全共闘運動がなくてはありえなかったと書く。大学院では卒論以来のエマソン研究を計画していた彼は、大衆団交の折に教授たちに対して、彼らの学問・研究が公害・環境破壊において何か、何の役に立つのかと問うた。川崎市出身で、日々大気汚染にさらされていた岩瀬にとって、公害は無関心でいられる問題ではなかった。やがて大学は「正常化」し、授業が再開されるが、岩瀬は何ごともなかったように大学院の授業に戻る気になれない。そうした経過のなかで、水俣病事件にのめり込んでいく。彼がなぜ巡礼団に参加したのかはのちに確認する。

◇ 新潟へ(1970年8月4日～30日)

岩瀬は高橋孝次と2人で8月4日に水俣から東京までの旅をする(～8月15日)。帰路も往路同様に水俣へのカンパを求めながらの旅だった(表5)。岩瀬に聴いたところ、行き同様に帰路も、しかも富山・新潟経由で喜捨(カンパ)を乞いながら巡礼の旅をしようと考えたのは、「廻らないと完結しない」と思えたからだだった。表5からもわかるように、帰路は三井金属神岡鉱山、日鉱三日市精錬所、鹿瀬電工(前・昭電鹿瀬工場)といった各地にある公害を引き起こしてきた工場を訪ね、これとたたかう患者や弁護士と出会った。

表5 水俣 - 東京 (裏日本) 巡礼

8月4日	水俣～熊本
5日	熊本～大分
6日	大分～広島
7日	広島～浜田～出雲～松江～浜坂～福知山～敦賀
8日	敦賀～金沢～富山
9日	富山～神岡鉦山～婦中
10日	婦中～高岡～桜井～黒部
11日	長岡～新潟
12日	新潟～鹿瀬～新潟
13日	新潟～高崎
14日	高崎～安中
15日	安中～東京

(作成は執筆者による。)

期間中の日記から滞在日と滞在地を転記)

◇ 放浪 (1970年9月8日～11月9日)

9月12日、東北 - 北海道巡礼が始まる (~10月17日)。岩瀬に聴いたところでは、東北 - 北海道に向かったのは、運動の中心が東京となり、東京で終わってしまうことに対して、水俣の旗をかかえて北に行かぬばと考えたことがあるようだ。もともとは同行者がいる予定だったが、結局ひとり旅となった。砂田に見送られて上野駅を発った。この日の日記には、「水俣病をかかえて歩き回るといことはどうということだろう」という言葉が登場する。実際に、巡礼服に身を包み、「東京・水俣病を告発する会」の旗と大量のチラシ、水俣病のフィルムを〈かかえての〉旅だった。東北・北海道の各地を訪ねまわり、街頭に立ち水俣病患者へのカンパを訴え、乞われて映画「水俣病」の試写会をおこなった。『水俣巡礼』には彼が各地で預かったカンパの集計表が掲載されており、そこからおおよその足取りがわかる(表6)。旅の最中は小川プロダクションや、小川プロ作品の上映活動をする人などに連絡し、世話になった。

なお、表6を見ると、9月12日～19日の期間と9月20日～10月16日の期間とでは、表記に乱れがある。これは岩瀬が日記に記した2つの表を合体させたためである。本来、表記の統一をすべきところではあるが、日記の文面からはどこでカンパを募り何円得たのか、都市名を「//」とすべきなのかの判断が難しい箇所も少なくない。ついては表6の都市名列はもともとの岩瀬の表記のままとし、総計のみこちらで計算した。

表6 東北 - 北海道巡礼 カンパ集計

9月12日	仙台	4,818	10月1日		1,290
13日	〃	13,945			544
14日	〃	1,825	2日	根室	6,171
	盛岡	1,310			300
15日	〃	9,806	3日	釧路	2,512
	〃	977	4日		2,290
16日	八戸	3,531		帯広	2,963
	〃	600	5日	富良野	1,266
17日	札幌	5,800	6日		2,501
18日	〃	1,000	8日	札幌	6,650
19日	〃	1,357	9日	苫小牧	1,500
	〃	3,959	10日		9,217
	〃	6,784	11日	伊達	2,175
20日	札幌	1,025	12日	室蘭	3,050
21日	小樽	3,875		苫小牧	700
22日	札幌	565	13日	室蘭	1,650
23~24日		1,345			1,387
25日	稚内	650	14日		360
		1,800	15日		1,736
26日		460			500
27日	旭川	769	16日		180
28日	網走	1,076			500
29日	北見	975	総計 123,761円		
		140			
30日	釧路	5,127			
		800			

出典：岩瀬政夫『水俣巡礼』現代書館，1999年（岩瀬が日記中に記した9月12日～19日と9月20日～10月16日の表を合体させ、総計を計算した）

◇ 足元（1970年11月10日～71年4月3日）

岩瀬は東京に戻ってからも水俣中心の生活をつづける。11月28日、岩瀬は大阪・厚生年金会館でのチッソ株主総会に参加，翌日には患者たちの高野山参詣にも同行している。

その足で水俣に向かい、12月2日に到着、12月11日まで滞在した。東京に戻ってからは劇・苦海浄土のけいこが始まる。この時期の彼の日記からは、彼のなかで〈水俣にかかわること〉の意味が問い返され、根無し草であるみずからの「足元」にまなざしが向いていくさまが読み取れる。それは将来どう生きていくかという問いをはらむものだった。

◇ 告発 (1971年4月10日～11月28日)

劇・苦海浄土の公演初日を4月10日に迎える。この劇は新宿駅前の歌舞練場を皮切りに静岡や名古屋、京都、大阪、神戸、岡山、広島、福岡、熊本、水俣、鹿児島と巡演され、岩瀬もこれに参加した(表1の⑤⑥)。彼はそのあとにつづく東京公演(6月15日初日)にも参加したのだが、これをもって舞台を降りている。一方、岩瀬は9月3日から9月23日まで新田中学での臨時英語講師を務め、教師の仕事に手ごたえを憶える。10月24日には東京都教職員試験があった。こうして彼は「足元」を凝視し、進路を定めていくのだが、その一方で水俣とのかかわりも継続している。水俣病患者が上京すれば連日同行し、11月13日からは水俣に向かい、14日のチッソ水俣工場正門前入り込み激励集会に参加している。この時期の日記には、「生き方」という言葉が少なからず登場する。

◇ 幻の舟 (1971年11月29日～72年4月8日)

1971年12月6日、川本輝夫ら「自主交渉派」が丸の内のチッソ本社前で入り込みを始め、岩瀬も加勢する。12月6日当日の日記には、その前夜の思いとして次のことが書かれている。「他者、即ち水俣病患者の存在がみずからに意志決定をせまる。存在としてせまってくる。俺は関係ないと逃げれば逃げられないこともない。しかし、何もできないことを覚悟の上で、ただ患者さんと島田社長の水俣病の特殊存在を見極めよう。[中略] 何のためらいも不安もなく、その場をつくることに加担しよう」(岩瀬 [1999: 424-425])。72年に入っても岩瀬は「五井事件」の現場などにおいて、カンパ活動など支援活動をつづけている。その一方で、東北 - 北海道巡礼の折に盛岡で世話になった川村千鶴子さんと婚約・結婚し、2月10日には大島南高教師の内定を得て、4月5日竹芝栈橋から家族に見送られ伊豆大島に向かう。

以上で日記は終わる。

3.2 岩瀬の「水俣巡礼」はどのような意味で巡礼なのか

3.1では『水俣巡礼』の章立てに従い、当時の岩瀬の動きと、彼が参加し・出かけた巡礼の旅について確認した。最初の「東京 - 水俣巡礼」はこれが正式な名称だが、その後の岩瀬・高橋の「水俣 - 東京(裏日本)巡礼」、岩瀬の「東北 - 北海道巡礼」にはとくに名があるわけではない。岩瀬の日記のなかでも複数の呼び方がされている。ただし、岩瀬自身、帰路の旅、東北 - 北海道の旅のことも「巡礼」の名で呼んでいる。では、これらはどのよ

うな意味で「巡礼」と呼びうるのか。とくに岩瀬の理解にそくして検討していきたい。

まず東京 - 水俣巡礼の場合、砂田明が『曾根崎心中』の巡礼道行きを念頭に置いていたことから、これがいわゆる「巡礼」を念頭に置いて構想されたことは確かである。ただしこのことは、岩瀬が砂田と同じく思いなしていたことは意味しない。事實は逆で、筆者が聴いたところでは、岩瀬は砂田のような発想をしていなかった。当時の彼に問題だったのは、水俣にどうすれば行けるのか、つまり悲惨な状況が想像される人たちに会い・何をいえるのか、ということだった。そのとき巡礼同行を砂田から誘われ、岩瀬は「それならば行ける」と思ったのだという。このように考えると、岩瀬において、水俣巡礼はいわゆる「巡礼」とは呼べないのではないか。

だが、実際にはそうではない。なによりも白衣に身を包むとは、行衣として死者の装束を身に着け、俗世を離れ、清浄な身で精進を重ねることだとされる(佐藤 [2006: 55])。それはいわば「聖なるシンボル」を衣に書き込み、〈かかえて歩き回る〉ことである。岩瀬において、そのシンボルとは「水俣」の2文字にほかならない。山折哲雄はカミの巡行や遊行に巡礼の祖型を見るが(山折 [1995: 58-59])、そうだとすれば岩瀬は「水俣」の2文字において〈聖なるもの〉の巡行・遊行を果たしていたといえる。のちに詳しく検討するが、岩瀬の日記に出てくる〈水俣病をかかえて歩き回る〉とはまずもってこの意味に解すべきである。この論点は2.1では確認しなかったことである。ただし、私たちはここである旅を巡礼であると見なしうる条件に出会っている。

3.3 〈水俣病をかかえて歩き回る〉とは

以下ではいよいよ〈水俣病をかかえて歩き回る〉とは何であるのかということについて検討を加えていく。ただし、この点を論じていくには、1つの前提を設ける必要がある。それは、岩瀬における〈聖なるもの〉とは何であったかということである。岩瀬はこうした〈聖なるもの〉について一切語らないが、推論した上でつづく作業に入ろう。

まず、そもそもなぜ岩瀬は公害問題、さらに水俣へと向かったのかを考えてみたい。彼自身『水俣巡礼』の「あとがき」や日記中で言及するとおり、その1つには地元川崎の大気汚染が他人ごとではなかったことがあった。また、彼は工業高校を卒業し、大学に進学するまでの2年間、多摩川河口近くにある味の素中央研究所に入所し、研究者の助手として、おもにイオン交換膜を使用した応用研究のデータを採る仕事に従事していた。岩瀬に聴いたところでは、その際に見知った企業の廃水処理の実態もあった。加えて彼によれば、高校時代の教師・菅竜一の影響もあった⁽¹⁰⁾。

このようにきっかけを辿ればいくつかが挙げることができるが、ここでは岩瀬が直接言及しない次のことに注目しておきたい。すなわち1970年代初頭「具体的なものの方へ」という志向性が時代思潮としてあった、ということだ⁽¹¹⁾。ここでの「具体的なもの」とは現実や現場といった言葉に置換可能だが、これこそ1つの〈聖なるもの〉だった。このもとで

は具体性の方にこそホンモノがあり、おもしろさがあり、一方で観念的な言葉を連ねるだけのもの（たとえば学問・研究）は否定されるべきものとされた⁽¹²⁾。たとえば岩瀬自身も「具体的な問題にコミットしてすすんでいかなければ「公害」を単に研究に終わらせてしまう恐れがある」と書くが（岩瀬 [1999 : 29]）、彼自身が公害問題から水俣へと関心を収れんさせていくプロセスにはこうした〈聖なるもの〉としての具体性があったに違いない。

一方当然だが「具体的なもの」の「方へと向かう」ことは、「具体的なもの」の「なかにいる」ことと同じではない。よりはっきりいえば、「なかにいらない」からこそ、私たちはそこに〈聖なるもの〉を感知し、恐るおそる「向かいたい」と思う。このように考えると、水俣巡礼とはいわば、「なかにいらない」者たちが「恐るおそる「向かう」」ための表現だったといえる。1970年7月9日、岩瀬は熊本駅に着いたときのことを「遂に来た、という感じがする。多くの人が出迎えてくれた。感激」と書き記す（岩瀬 [1999 : 71]）。それは実際に水俣に行きたい、「具体的なもの」に近接したいと願った彼にとって、少しの曇りもない素直な思いだったはずだ。

では、私たちはいよいよ「具体的なもの」のなかに入ったとき、どんな経験をするのだろうか。つまり〈聖なるもの〉は〈聖なるもの〉としてそのままなのだろうか。もちろんそれは、途端に目が醒め、一切魅せられることはなくなる、つまり水俣が〈聖なるもの〉でなくなる、などということではない（仮にそうであれば、岩瀬はこのち巡礼をつづけただろう）。そうではなく、現実の質量を経験し、その現実（＝具体的なもの）や自分、そしてそれらの関係についての「わからなさ」が深まっていく時間だったはずだ。実際に岩瀬は「東京・水俣病を告発する会」でのある座談会（1971年1月19日）で次のように語る。

僕にとっても、例えば巡礼で水俣に行ったからといって、そこで、何か明らかに変わったかという、何もわからなくて、又、自分だけで歩いていくしかなかったんですよ。（岩瀬ほか [1971 : 3]）

この座談会前後の日記には、関連する話題が出ているので、それも補足しながら引用文の意を解してみる。前提には、水俣病患者の味わってきた「筆舌につくし難い苦難」を前にすると、「自己の存在の叫び」などというものがいかに幻想であるか、ということがある。この「叫び」は「自分の表現」と言い換えられるが、岩瀬自身もそうした叫びを一度は発してみたいという願望をもっていた。だが、実際に水俣に行くと、自分の「叫び」などは水俣の患者の前では沈黙に等しいと自得せざるをえない（岩瀬 [1999 : 290]）。もちろん水俣病患者の沈黙の深さが「わかる」からそういうのではない。それははかり知れず、代弁できるものではない。だからといってその「苦難」から目を逸らすのではなく、どうにか自分なりのぎこちない表現で「叫ぼう」とする。このとき岩瀬が選んだ表現行為の方法が、「自分だけで歩いていく」ということだった。

この「自分だけで歩いていく」とは、手ぶらで歩いていくということでは無論ない。そうではなく〈水俣をかかえて歩いていく〉ということである。ここにきて本稿の掲げる問いの答えがようやく得られる。〈水俣をかかえて歩く〉とはどういうことか。

先にそれは「水俣」の2文字を「聖なるシンボル」としてかかえて歩くことだと述べた。また、より実際的には旗を立てて、水俣病の映画フィルムとチラシをかついで歩くことでもある。ただそれにも増して重要なことは、水俣を訪ね、実際にその地で過ごした岩瀬が水俣の発する問い(=課題)を「わからないながら」引き受け、その問いに自身も晒されながら、それを〈かかえて〉歩き伝えようとする、ということである。それは1970年当時の岩瀬に取りうる精一杯の思いなし・行為であり、また「巡礼」の名にふさわしいものだった。

3.4 問われる経験

さて、3.3において本稿の主題への応答は済ませた。一方、3.4では〈かかえて歩き回る〉ことと他者との関係について1点補足しておきたい。すなわち、〈水俣病をかかえて歩き回る〉とは、歩き回るゆえに他者との関係に入ることである。そのなかで巡礼者はさらに問いに付され、鍛えられる。岩瀬において、このことが顕在化するのには、東北-北海道での巡礼である。簡単に確認しておきたい。

もちろん、岩瀬において他者から問われる経験が旅の目的にあったわけではない。たとえば岩瀬は東北-北海道巡礼に出るに際して、「1人旅、1人の決意、自己との対決。これから北海道まで1人で行くんだと思うといろいろ考える。「群衆の中で熱するのは易い。しかし1人で熱するのは容易ではない」と書く(岩瀬 [1999:128-129])。この箇所を読むと、岩瀬がこの旅でテーマにしていることは、あくまで「自己との対決」であり、「水俣との関係でのアイデンティティ(自己の存在証明)の形成」であるように思える(栗原 [1999:8])。

もちろん、その一面はあっただろう。ただし、見逃してはならないのは、ここで岩瀬が向き合っていることは、水俣の現実=問いを〈かかえて〉、他者との関係のなかを歩くということである。そして、それは土地々々で出会う具体的な人びとのまなざしや言葉によって照射され、逆に問いに付されることでもある。それはアイデンティティ形成ではとどまらない側面をもつ。

この点についてさらに検討してみよう。岩瀬は街頭でビラを撒き、人びとに声をかける。多くの人には気かけない。気にかけても奇異なまなざしを向ける。八戸のバスのなかで彼は、すべての乗客から注目されるのに気づき、「もう慣れてしまったが初めての人には奇異な印象を与えるのだろう」と書き記す(岩瀬 [1999:134])。一方でこの旅は「他人の善意に頼って」成り立ち(岩瀬 [1999:145])、「街頭で偶然あった人たち、僕のせい一杯の呼びかけに答えてくれた優しい人たちがいてこそのものである(岩瀬 [1999:131])。そうした「優しい人たち」によって、岩瀬の伝えたいことは聴き遂げられる。

もちろん、他者はいつも岩瀬のことを疑問もなく聞き入れるわけではない。たとえば東北 - 北海道巡礼も真ん中に差しかった1970年9月30日のことである。釧路にいた彼は、ベ平連活動をしている高校生から「ちょっと待って下さいよ、私たちにも重要な問題があるんですから」といわれ、一瞬ハッと「自分の欠点は今、自分のやっていることが最良のことと思ひ、人にそう語ることであり」と気づいた(岩瀬[1999:167])。岩瀬は水俣に魅せられ、そのもとへと行き、いまその現実を伝えようと巡礼をつづけている。だが、彼が各地で出会う人びとにも具体的な課題はある。水俣が岩瀬にとっては大事な課題だとしても、他者においてもそうだとはいえない。

同じことは伊達紋別の「正木先生」という高校教師からの指摘でいよいよ明らかになる。正木先生は岩瀬に次のような「深く心に残る」話をしたという。

中央とか地方の違いではなくて、どこにいても人それぞれに完結した世界があるのであり、そこを見なければいけない。つまり自分自身を見つめるということなのだ。他人とは絶対に違う自分自身を。君があつて水俣病があるのではない。君が歩いたから水俣病の運動が広がったのではない。君と水俣病とは最初から違うのだ。ただ、水俣病が君自身の中に呼び起こしたものは大事にしなければならない(岩瀬[1999:192])。

核心をつく指摘である。岩瀬はこの正木先生の言葉を引いたあとに「水俣病患者の存在によって動かされた自分と、水俣病とは本来全く性質の違うものだ」「揺り動かされたからといって、直接的に水俣病にかかわる必要はない」という認識を書き記す(岩瀬[1999:192])。

岩瀬は具体的なものとの出会いを求めて水俣まで出かけた。そこで出会い・結びついた患者たちはあくまで他者であり、彼ら彼女らのおかれる窮状を占有し、代弁・代行できるものではない。それよりもそもそも大切にすべきは、自分はなぜ水俣という「具体的なもの」の方へと向かい・さらにはかかえて歩きつづけようと思ったのかである。〈水俣病をかかえて歩き回る〉とは、そうした問いをも〈かかえる〉ことを意味したのだ。私たちはここに、他者から問われることをつうじて、問いをなお〈かかえて歩く〉岩瀬の姿を見届けられる。

おわりに

本稿では、1970～71年にあった「水俣巡礼」について、とくに巡礼者の1人、岩瀬政夫の〈水俣病をかかえて歩き回るとはどういうことか〉という問いに注目して、その解明を試みた。水俣巡礼とは、たとえば砂田明が1970年7月の東京 - 水俣巡礼において意図したように、水俣までの巡礼の旅であり、そのかぎりでは巡礼の思想史のなかにも位置づくるものである。一方、水俣巡礼がそこにとどまらないのは、水俣を訪ねめぐった巡礼者は、たとえば岩瀬がそうであるように、水俣で「具体的なもの」、つまり水俣のもたらす具体(現

実) 的な問い (=課題) と出会わざるをえなかったからである。そして、巡礼者はこの問いに答えようとして、その問いを〈かかえて〉さらに歩き回った。これは一見、いわゆる「巡礼」からの逸脱ではあるが、〈かかえて歩き回る〉ということ自体が巡礼の「祖型」だともいえる。本稿では先の岩瀬の問いにこのように答えた。

さて、本稿では以上のことを、主として岩瀬政夫の日記を頼りに考えた。そうであれば、これは岩瀬個人が当時抱いていた思いなしへの一解釈にとどまるともいえる。たしかに一面ではそのとおりである。だが、筆者は、〈水俣病をかかえて歩き回る〉ことが、水俣のもたらす具体 (現実) 的な問い (=課題) を〈かかえ〉、それぞれの現場を歩き回ることだとすれば、それは巡礼者たち誰もがその後の人生においてなしてきたことだと考える。また、これをより広げれば、1970年代から現在まで、水俣に心寄せかかわろうとしてきた者たちが、水俣病をめぐる状況のなかで各人各様に抱いてきた思想でもあったと考える。これについては稿を改めて検討したい。

本稿を閉じるにあたり付け加えておきたいことがある。それは、岩瀬が大島に旅立ったのち、〈水俣病をかかえて歩き回ること〉は終わったのか、ということだ。いや、それは違う。そもそものポイントは各人各様の「具体的なもののなかで」その問い (=課題) を引き受け、それにごちちなくとも何とか応えようとすることである。そうであれば、「水俣」はたとえばXとなり、そのXにはさまざまな問いが代入される。岩瀬の場合、彼は1980年に東京都教育委員会が出した大島南高校定時制の統廃合案に対して、職場の同僚や島の人と共に反対の声を上げ、阻止運動を展開した (岩瀬 [1981])。それは大島南部地区という「具体的な現場で」定時制高校を残したいという人びとの声に耳を傾け、引き受けることである。1982年、阻止運動が功を奏し、大島南高校定時制は、大島高等学校の南分教場として内実を残すことになる。筆者は、こうした岩瀬政夫にかつてと同じく〈水俣病をかかえて歩きつづける〉姿を見いだす。この意味で、水俣巡礼はつづいている⁽¹³⁾。

註

- (1) 本稿はもともと「日本思想史学会 2023 年度大会」(東北大学, 2023 年 11 月 12 日)でおこなった発表の原稿にもとづく。この発表原稿を本稿のかたちにする過程で、川本隆史氏の開く「オープン Zoom セミナー第 30 回」(2023 年 11 月 26 日)にて発表する機会を頂戴した。
- (2) 巡礼団員の実際の様子は宮本成美の写真集『まだ名付けられていないものへ または、すでに忘れられた名前のために』からうかがい知ることができる (宮本 [2010])。
- (3) 患者たちがチッソ株主総会に白装束姿で行くことを決めた詳しい経緯は定かではないが、このことを提唱したのは患者家族の田中義光だった。元船大工の田中は、かつて病気で遍路をしたことのある人物だった (田中ほか [1971 : 144])。「水俣病を告発する会」代表の本田啓吉によれば、「(そうした) 田中義光さんの提唱で、患者家族は巡礼姿で行くことにし御詠歌も習い覚えた。別に真言宗の信者ではない。水俣病患者にとっては、そんなことはどうでもよかった」のだという

(本田 [2007 : 179], () 内引用者による)。

- (4) 砂田明についてのより詳しい考察は、星埜 [2007] を参照されたい。この論文の著者・星埜守之は学生時代に砂田と交流をもっていた。この論文では、水俣巡礼以降の砂田の芝居にも注意し、砂田の芝居が〈命の^{あらたま}草り〉への潜勢力を秘めることについての重要な指摘がなされている。
- (5) 1968年9月26日、水俣病が公害認定された。これを受けて患者はチッソへの補償要求をおこなう。その際、厚生省があっせんに乗りに出すが、患者側はこれへの対応の仕方によって2派に分裂した(一任派と訴訟派)。つまり、対応をめぐる厚生省の補償処理委員会に一任する派と、一任せずチッソを相手どって損害賠償請求訴訟をおこす派である。
- (6) 水俣巡礼において「もうひとつのこの世」の現れを思ったと話してくれたのは、宮本成美である。彼は当時、既存の社会観、社会思想に対して強い疑いを抱いていた。そうした彼は社会党機関誌のカメラマンとして1970年5月25日の五月行動を取材したのだが、彼はそこに日常から切断された特別な状況があると直感した。このことが縁となり、彼は水俣の取材をつづけ、水俣巡礼に巡礼者の1人として同行する。
- (7) 『日本思想史学』第45号(2013年9月30日)には、日本思想史学会2012年度大会シンポジウム「遍路・巡礼の思想」が収められている。このうち船田淳一の報告「中世巡礼の精神史 山形修行者と冥界の問題」では佐藤 [2010] が取り上げられ、検討が加えられている(船田 [2013])。
- (8) もちろん水俣病患者自身がこのように解することはあるだろう。たとえば次節でも触れるが、水俣病の訴訟派患者家族は巡礼姿で1971年11月に高野山参詣を果たし、奥の院の弘法大師の前で追弔和讃を唱え、死者の冥福を祈っている。
- (9) たとえば石牟礼は次のように書く。「これほどの極限的不幸を中心にすえる運動であるゆえ、時代が内蔵する病いの深淺をさまざまに負い、魂の寄るべを求めてさすらい寄ってくるひとひとのことである。おそらくは水俣病患者たちよりも救われ難い存在であり、このような群は、絶対御本尊である患者たちに拝跪かなうや、それぞれの病いに応じて感応し、たちまち魂飛んで、うつつの発祥地の上を舞いめぐりながら、聖域の供物をついばみ去ってゆく」(石牟礼 [1973b : 426])。
- (10) 菅竜一は川崎工業高校で数学・物理を教える一方、演劇部の顧問を務め集団創作劇の制作などをする人だった。「女の勤行」で1964年に岸田國土戯曲賞を受賞している(菅 [1998])。
- (11) たとえば北海道大学を辞め、市井の哲学者としてアイヌの人びととかかわり生きてゆく花崎皋平がカレル・コシーク『具体性の弁証法』(せりか書房)を翻訳したのは1969年のことだった(改訳版『具体的なもの弁証法』1977年)。また、津村喬が『革命への権利 具体性のほうへ』(せりか書房)で、アンリ・ルフェーブルなども引きながら理論の現実化として闘争を語ることから具体性のほうへの(方向転換)を主張したのは、1971年のことだった。これらはマルクス主義とのかかわりでいわれるが、それ以外にも、たとえば野本三吉が「自分の言葉と使って使っていた言語のニセモノ性——そこをうちやぶって、自らの言葉の表現を発見し、創造してゆく行為、それができないかどうか」と書き、各地のコミュニオンを訪ねたのも、同じように〈具体的なものの方へ〉という志向性の現われだといってよい(野本 [1970 : 51])。
- (12) 1973年7月12日のチッソ本社前テント撤去のち支援者による座談会がもたれている(合田ほか [1973])。そこでは水俣病闘争は「何しろおもしろくて」といわれ、「水俣闘争こと大学だった」と語られる。

- (13) 本稿を書くにあたり、次の方たちに水俣巡礼ならびに「東京・水俣病を告発する会」の初期の活動についてインタビューをお願いし、快諾のうえ貴重なお話を頂戴した。岩瀬政夫氏（インタビュー日：2023年11月17日、18日）、宮本成美氏（同10月13日 ※宮本氏からは当時の貴重な資料を多数頂戴した）、白木喜一郎氏（同10月20日）、久保田好生氏（同10月19日）。

参考文献

- 石牟礼道子（1972）『苦海浄土 わが水俣病』講談社文庫（初出年、1969年）。
- （1973a）「もうひとつのこの世へ」『流民の都』大和書房（初出年、1970年）。
- （1973b）「絶対負荷をになうひとびとに」同上（初出年、1971年）。
- （1975）「新しい民間伝説の創生」、砂田明『祖さまの郷土 水俣から』講談社。
- 石牟礼道子、中村了権（1994）「苦海に生きる」『葛のしとね』朝日新聞出版（初出年、1988）。
- 岩瀬政夫（1971）「巡礼帰路の旅」『縮刷版 告発』東京・水俣病を告発する会（初出誌、「水俣病裁判支援ニュース「告発」1970年9月25日、第16号）。
- （1981）「定時制高校の灯を消すな」『しま』財団法人日本離島センター（発行年月号、1981年1月25日、第10号）。
- （1999）『水俣巡礼 青春グラフィティ'70～'72』現代書館。
- 岩瀬政夫ほか（1971）「座談会 水俣と私」『東京・水俣病告発ニュース「苦海」』東京・水俣病を告発する会（発行年月号、1971年3月1日、第6号。座談会出席者のフルネーム明記なし）。
- 岡田徹（1971）「水俣巡礼の旅」『縮刷版 告発』東京・水俣病を告発する会（初出誌、「水俣病裁判支援ニュース「告発」1970年7月25日、第14号）。
- 岡本亮輔（2015）『聖地巡礼』中公新書。
- オッター、ルドルフ（2010）久松英二訳『聖なるもの』岩波文庫（原著、*Das Heilige: Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen*, 1936）。
- 栗原彬（1999）「〈解題〉不可視の旅 存在の根を求めて」、岩瀬政夫『水俣巡礼 青春グラフィティ'70～'72』現代書館。
- 桑原史成（2013）『桑原史成写真集 水俣事件』藤原書店。
- 合田計子、高木隆太郎、藤野良美、柳田耕一、森田明博、米田正篤（1973）「水俣病闘争はおもしろかった」『終末から』筑摩書房（発行年月号、1973年12月30日、第4号）。
- 佐藤久光（2006）『遍路と巡礼の民俗』人文書院。
- 佐藤弘夫（2010）「霊場と巡礼」、入間田宣夫編『兵たちの時代Ⅲ 兵たちの極楽浄土』高志書院。
- 白木喜一郎（2022）「連載 砂田明さんノート 3 続・1970 東京 - 水俣巡礼団」『季刊水俣支援 東京ニュース』東京・水俣病を告発する会（発行年月号、2022年7月25日、No.102）。
- 菅竜一（1998）「教育実践 戦後の高校教育とともに歩んだ日々」『季刊 大学と教育』東海高等教育研究所（発行年月号、1998年10月20日、第25号）。
- 砂田明（1975）「撃たれの旅」『祖さまの郷土 水俣から』講談社（執筆年月、1970年8月6日）。
- （1983）「夢勧進・問わず語り」『海よ母よ子どもらよ 夢勧進の世界』樹心社。
- 寿山良海（1916）『現代の修養』竜泉寺。
- 田中義光、渡辺栄蔵、浜元二徳、坂本フジエ、日吉フミコ、田上信義、本田啓吉（1971）「患者家族座

- 談会 「裁判してよかった」『縮刷版 告発』東京・水俣病を告発する会（初出誌、「水俣病裁判支援ニュース「告発」」1970年11月25日，第18号）。
- 土本典昭（1974a）「水俣 患者さんとその世界」，『映画は生きものの仕事である 私論・ドキュメンタリー映画』未来社（映画「水俣 患者さんとその世界」1971年シナリオ）。
- （1974b）「舞台に凝縮される水俣の霊 砂田明のこと」，同上（初出年，1971年）。
- 西谷啓治（1961）「日本における伝統的宗教意識」，武田清子編『思想史の方法と対象 日本と西欧』創文社。
- 野本三吉（1970）『不可視のコミュニケーション』社会評論社。
- 原田正純（1989）『水俣が映す世界』日本評論社。
- 本田啓吉（2007）「水俣と私」，本田啓吉先生遺稿・追悼文集刊行会編『本田啓吉先生遺稿・追悼文集』創想舎（初出年，1973年）。
- 船田淳一（2013）「中世巡礼の精神史 山林修行者と冥界の問題」『日本思想史学』日本思想史学会（発行年月号，2013年9月30日，第45号）。
- 星埜守之（2007）「砂田明という役者がいた」，最首悟・丹波博紀編『水俣五〇年 ひろがる「水俣」の思い』作品社。
- 宮崎忍海（1920）『生の宗教』六大新報社。
- 宮本成美（1998）「砂田明について」，『起ちなはれ 砂田明の世界』砂田明追悼碑建立委員会。
- （2010）『まだ名付けられていないものへ、または、すでに忘れられた名前のために 宮本成美・水俣 写真集』現代書館。
- 和辻哲郎（1961）「古寺巡礼」『和辻哲郎全集 第2巻』岩波書店（初出年，1919年）。
- 山折哲雄（1995）「巡礼とは何か」『巡礼の思想』弘文堂（初出年，1993年）。